

北海道各地から産出する黒曜石  
その6おけとちいき  
置戸地域

(Oketo Area)

置戸地域の黒曜石は、道内の四大産地の一つに数えられます。この地域では、置戸山と所山（ところやま）に黒曜石の溶岩が存在し、それぞれ置戸山黒曜石、所山黒曜石に分類できます。

置戸山の訓子府川林道沿いでは、人頭大程度の黒曜石を多数採取できます。その他に、くすんだオレンジ色～赤色を呈する“茶の石”や“花十勝”も少量ですが採取できます。地質図幅説明書（沢村ほか、1965）によれば、『新第三紀鮮新世の流紋岩に伴って黒曜岩の露頭が存在する』と記載されていますが、現地では既に露出が悪く、しばらくの間確認できませんでした。調査を継続していた2000年を過ぎた頃、所山で溶岩流の見事な断面が発見されました。

置戸地域では、球顆を含むものは少なく、大きくて良質なものばかりです。黒曜石の断面は、滑らかで透き通った感じの光沢があり黒色と灰色がうっすらと縞状になった流理構造が見え、置戸地域の黒曜石を特徴づけます。薄く割れた時には半透明で、独特な色合いを呈し、クリスタライト（晶子）の濃集の度合いで直線状や毛状の独特の模様になっています。全て貝殻状断面になり石器の材料として最適ですが、白滝産と違い、少しクセがある割れ方を示します。

分析すると、置戸山黒曜石と所山黒曜石は、置戸組成グループに大きく分類されますが、更に、 $\text{Na}_2\text{O}/\text{K}_2\text{O}$ 比に着目した場合、“置戸山黒曜石”は、その比が1.0以上に該当し、置戸Ⅰ組成グループ、“所山黒曜石”は、1.0未満に該当し、置戸Ⅱ組成グループに分類できます。

中里地区では、火砕流堆積物の中に丸くなった0.5～2.0cm前後の黒曜石が入っていました。分析したところ、置戸山黒曜石と所山黒曜石の双方に由来することが分かりました。置戸地域の黒曜石は、FT（フィッシュン-トラック）法によって、約390万年前に噴出したことが知られていますが、この黒曜石が火砕流中に含まれているということは、この火砕流の方が新しい堆積物であるということが分かります。このように、黒曜石は地層年代の対比としても応用することができます。（学芸員 向井 正幸）



置戸山黒曜石。独特な色合いとクセのある断面を持つ。



所山黒曜石の溶岩部分。破碎されている中に人頭大の黒曜石もある。ちょっとした大発見。



左側の露頭を離れて撮影。溶岩流の上は表土に覆われている。

地学シートHP



地学Sheets

Asahikawa City Museum

旭川市博物館HP

